

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

長谷川, 尚人

九州大学大学院、人間環境学府、空間システム専攻、建築史学研究室

<https://hdl.handle.net/2324/21679>

出版情報 : 2012-03-12

バージョン :

権利関係 :

近代西本願寺の別院本堂建築における 「印度佛教式」意匠について

九州大学大学院 建築史学研究室 長谷川尚人





西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

1934



西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

1934

西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

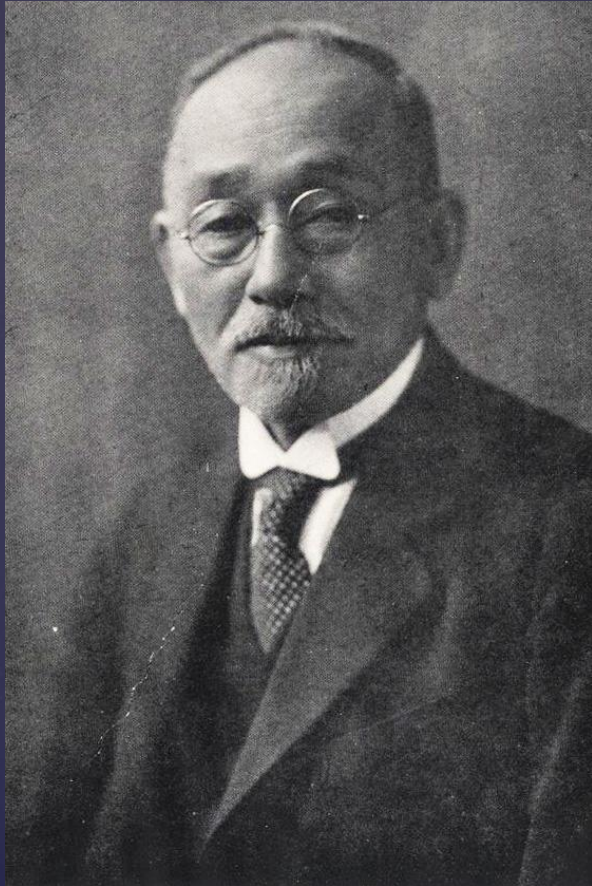
伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

1934



西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

1934





西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

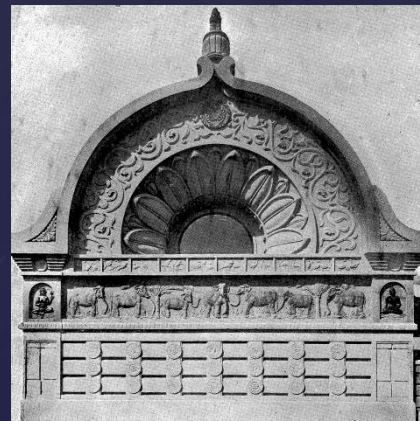
伊東忠太

大谷光瑞

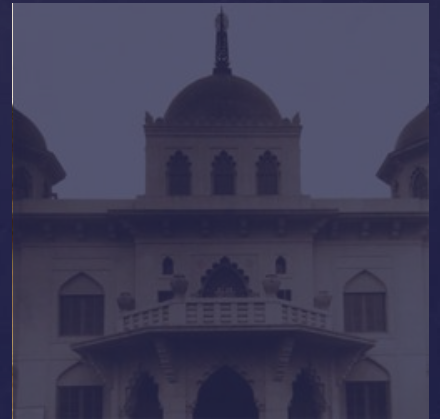
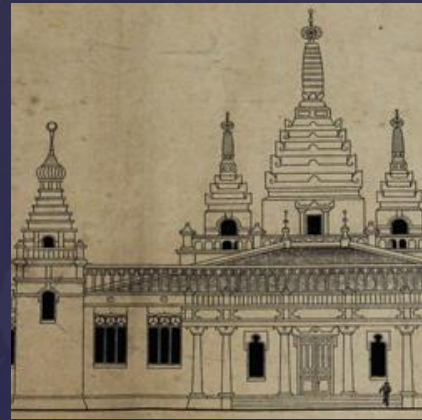
大連別院

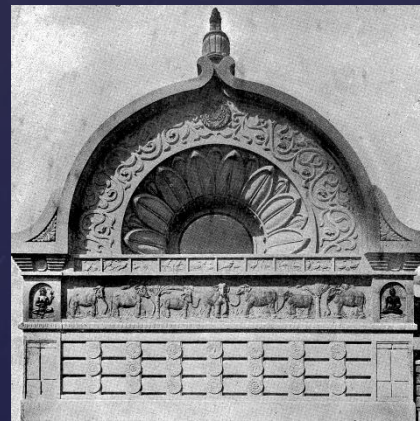
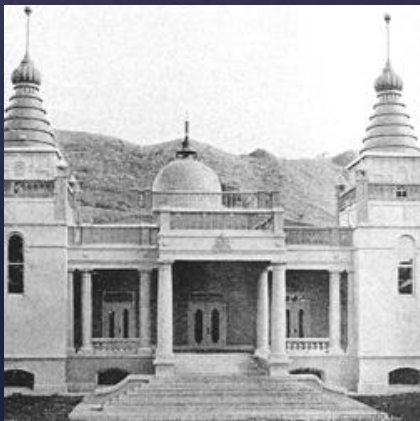
鎮西別院

1934










- 1 伊東忠太の提案が実現したのは伝道院と築地別院のみである
- 2 大谷光瑞の在任前後も西本願寺は特異な建築を建立している
- 3 西本願寺が一連の建築の施主である

西本願寺のどのような意図のもとに
これらの特異な建築が実現したのか





1 時系列でみた一連の建築的現象

2 西本願寺の二大活動と社会状況

西本願寺のどのような意図のもとに

これらの特異な建築が実現したのか

光尊寺



1875

大連別院



1907

函館別院



1908

大泊別院



1908

二楽荘



1909

仙台別院



1910

鎮西別院



1911

伝道院



1912

大谷光瑞の在任前後も西本願寺は特異な建築を建立している

布哇別院



1918

神戸別院



1930

上海別院



1931

光徳寺



1932

光尊寺



不明

大連別院



伊東忠太

函館別院



不明

大泊別院



越本長三郎

二楽荘



鵜飼長三郎

仙台別院



不明

鎮西別院



伊東忠太

伝道院



伊東忠太

伊東忠太の提案が実現したのは伝道院と築地別院のみである

布哇別院



Emory & Webb

神戸別院



葛野壯一郎

上海別院

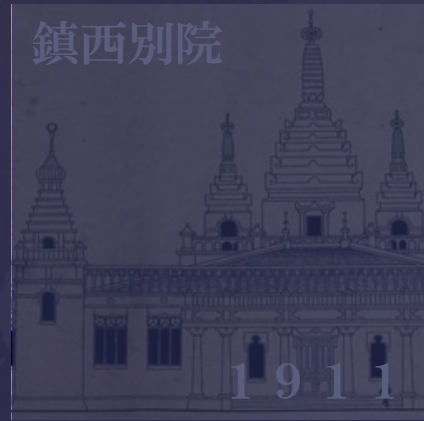


岡野重久

光徳寺



大林組



光尊寺

大連別院

函館別院



1875

光尊寺

1908

1908

オーダー

伝道院

色ガラス

洋風

1911

1912

本堂

光徳寺

明治初期

大谷光尊

1918

1910

1931

1932



光尊寺

大連別院

函館別院



1908

函館別院

1908

1908

「御拝」

伝道院

レンガ造

本堂

1911

1912

独特の迫元

光徳寺

細部

「印度佛教式」

1918

1910

1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



1910

仙台別院

1908

1908

明治建築

伝道院

本堂

馬蹄形

1911

1912

葱花線

光徳寺

細部

「印度佛教式」

1918

1910

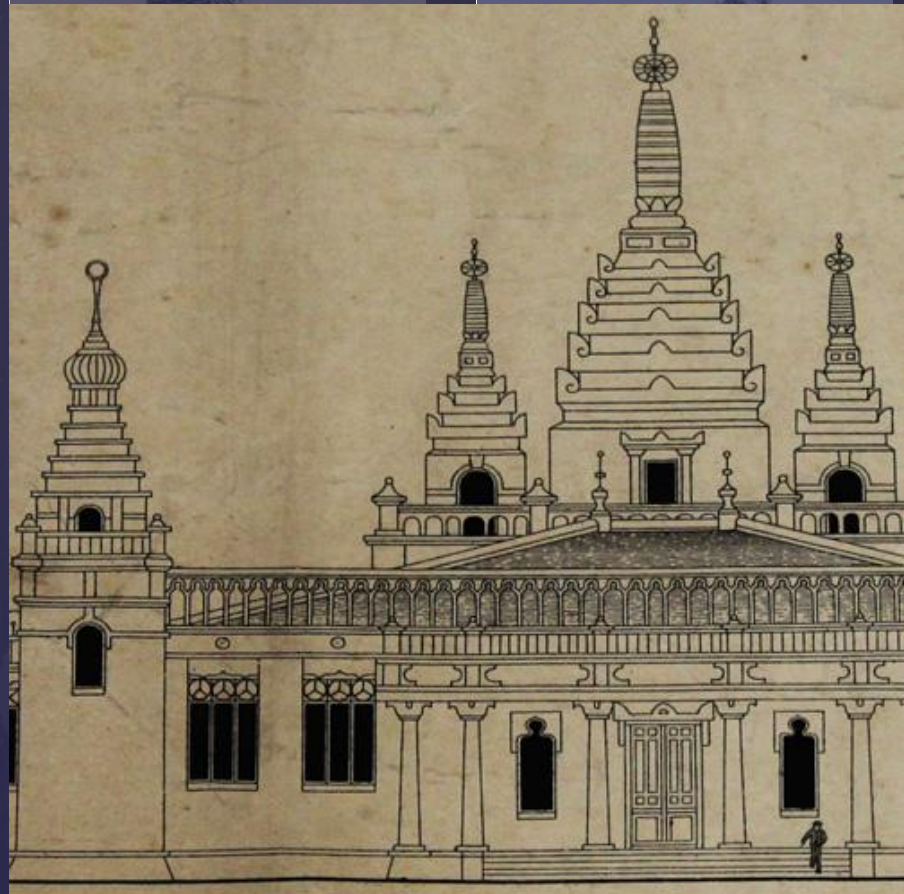
1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



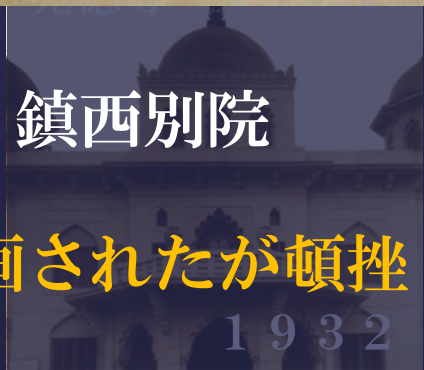
1907

大連別院

細部のみならず「印度佛教式」

1918

1910



1911

鎮西別院

とした別院も計画されたが頓挫

1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



1909

二楽荘

1912

伝道院

明治末期、そうした計画は別邸と社屋にしか実現しなかった

1918

1910

1931

1932



光尊寺

大連別院

函館別院

1918

布哇別院

ネオ・バロック

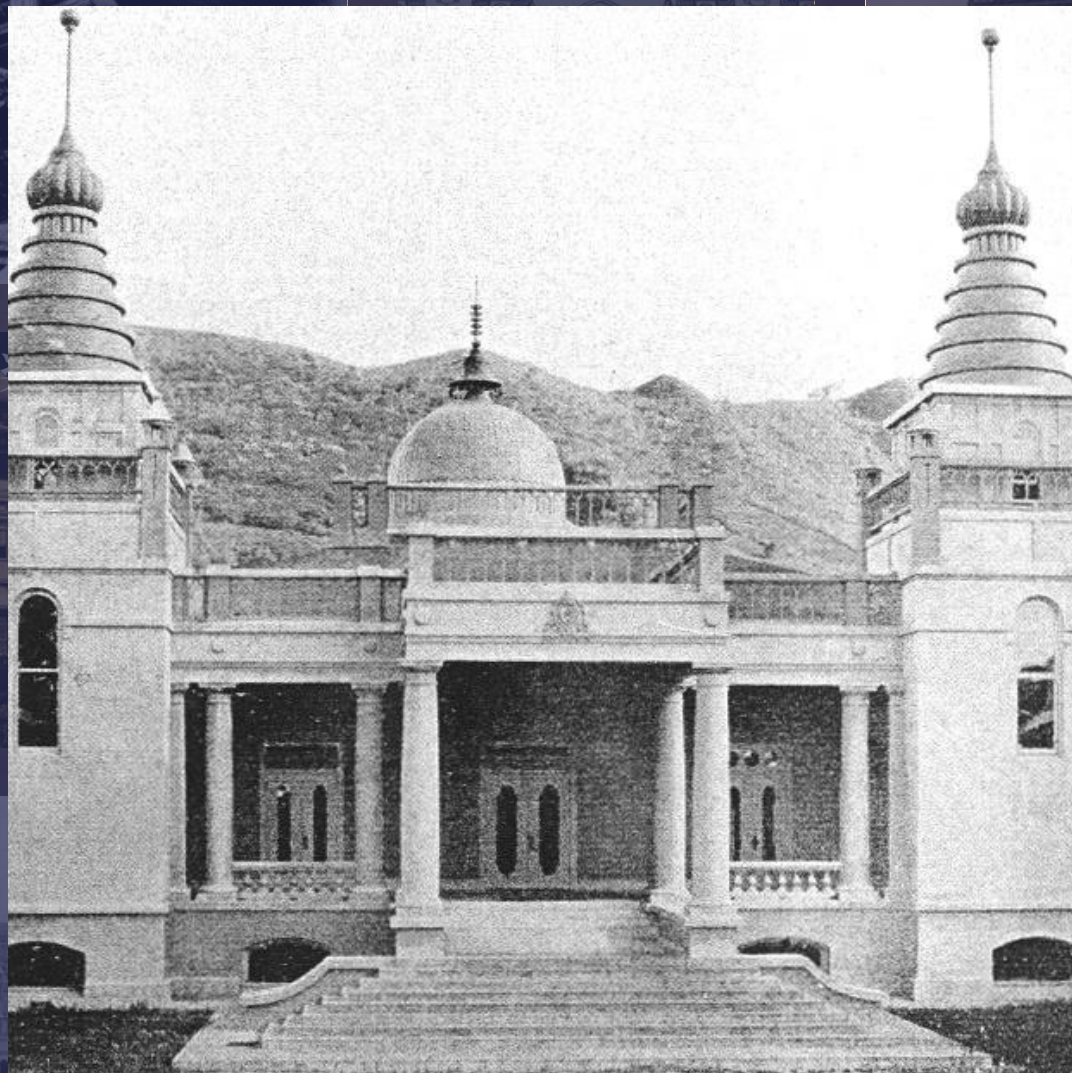
左右両塔

中央ドーム

塔屋

「印度佛教式」

光瑞隱退後

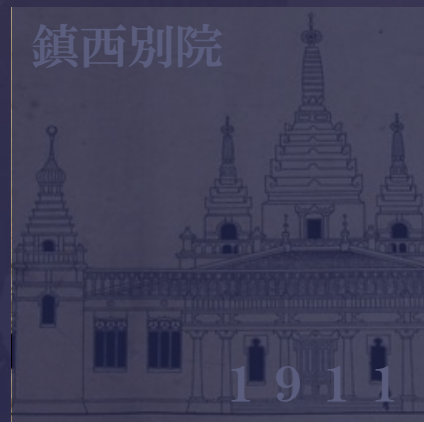


1918

1910

1931

1932



光尊寺

大連別院

函館別院



1930

神戸別院

葱花線

ヴォールト

無数の仏龕

五つの尖塔

「印度佛教式」

1918

1910

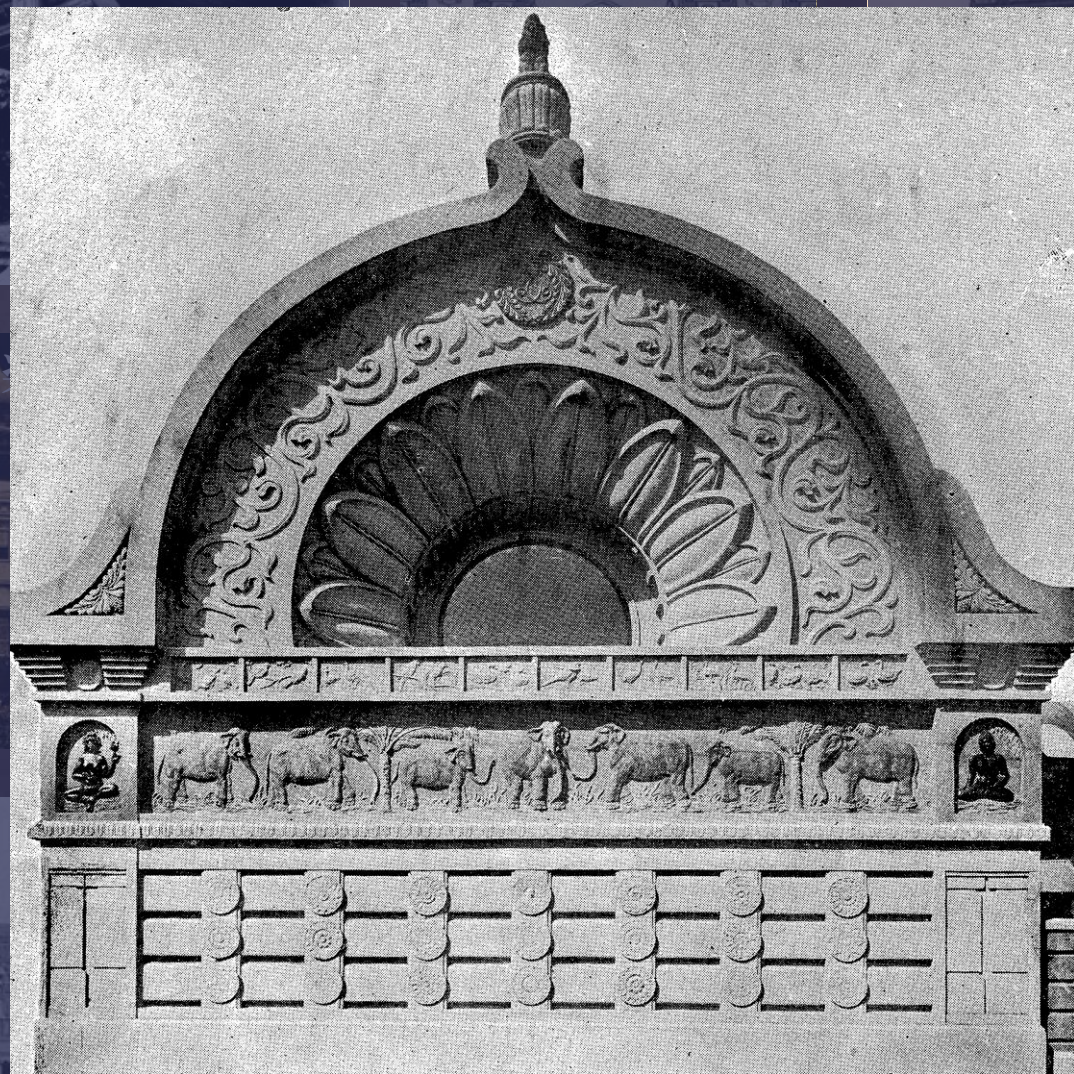
1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



1931

上海別院

独特の迫元

葱花線

ヴォールト

様々な彫刻

「印度アジヤンター式」

1908

1908

1911

1912

1918

1920

1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



1932

光徳寺 1908

3基のドーム

開口上部

雲形アーチ 1912

葱花線アーチ

「印度風近世式」

1918

1910

1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院



1934

築地別院

1908

1908

古代中天竺

中央の上部と向拝

両翼の玄関

1911

1912

葱花線

「印度佛教式」

1918

1910

1931

1932

光尊寺



1875

大連別院



1907

函館別院



1908



1908

明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する

二楽荘



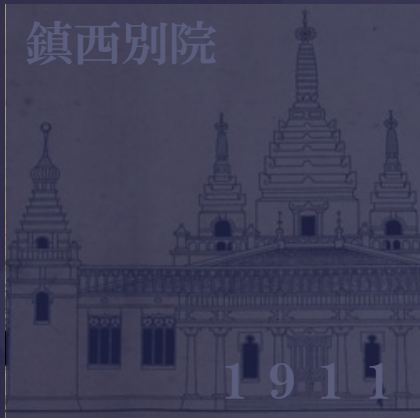
1909

仙台別院



1910

鎮西別院



1911



伝道院

1912



1918



1930



上海別院

1931



光徳寺

1932



明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する



明治末期、その細部に「印度佛教式」が実現する





明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する



明治末期、その細部に「印度佛教式」が実現する



大正期以後、その骨格に「印度佛教式」が実現する



明治初期

1 様式混淆の本堂建築




明治末期

2 細部に「印度佛教式」



大正期

3 骨格に「印度佛教式」



1 時系列でみた一連の建築的現象

2 西本願寺の二大活動と社会状況

西本願寺のどのような意図のもとに

これらの特異な建築が実現したのか

倒幕にもなう宗門改の喪失と
新政府による神仏分離の影響で



日本最大の仏教教団である西本願寺は
迅速に厩大な門徒を確保するという課題に直面した

教団 「迅速に厩大な門徒を確保したい」

「西本願寺を野放しにはできない」

国家

「仏教を大陸の教化に利用したい」



利益の一致

西本願寺は**アジア開教**に踏み出す

教団 「他の宗派との差別化を図りたい」

「二度の退学の経歴を挽回したい」

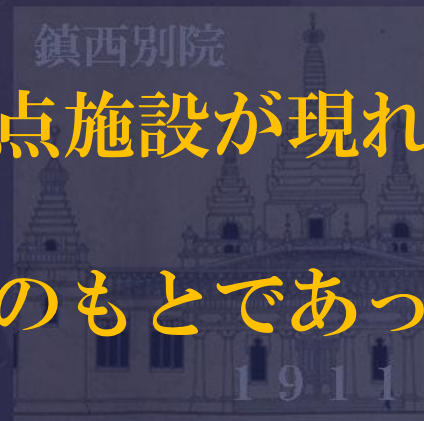
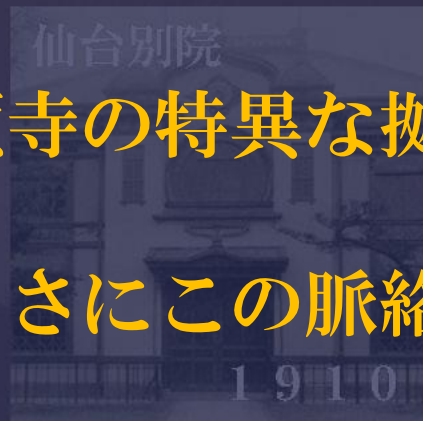
新門

「宗主に相応しい実績を造りたい」



利益の一致

西本願寺は**大谷探検隊**に踏み出す



西本願寺の特異な拠点施設が現れたのは
まさにこの脈絡のもとであった



光尊寺

大連別院

函館別院

その兆しはすでに大谷光尊の時代からみられたが

アジア開教や大谷探検隊、日本の大陸進出が

進展するにつれ、「印度佛教式」は汎アジア的

大仏教教団の象徴としての有用性が認められつつあった

すなわち、西本願寺は「印度佛教式」建築を

国内外で歴大な門徒を迅速に獲得するという目的のため

教団の広告塔として建立したと解釈できる

1875

1907

1908

1908

1

1912

1918

1910

1931

1932

旧来の本堂が本山の相似形であるのに対し
本研究の対象には厳格な意匠形式が示されていない



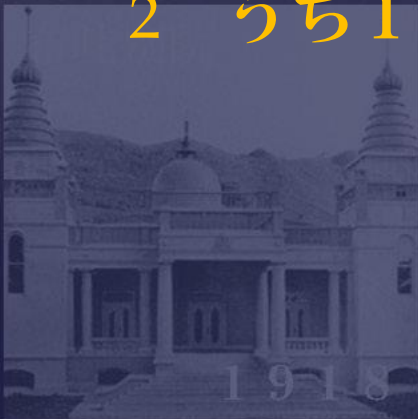


西本願寺は教義や仏教美術に特化した高度な学識を



有するにもかかわらず、13の建築に共通するのは

- 1 在来宗教の拠点施設としては極めて特異であること
- 2 うち11の建築が「印度佛教式」意匠を有すること



光尊寺

大連別院

函館別院

これを意匠形式の模索とみることもできるが

西本願寺の布教対象が国内外の一般大衆ならば 1908

二楽荘

仙台別院

鎮西別院

伝道院

1 広告塔として衆目を集めること

2 仏教の原点であるインドを彷彿させること

のみを条件に、深奥な学識は意図的に封印したとも 1912

伊東・鵜飼・葛野・岡野・Emory & Webbといった

建築家の独自性は、緩やかな制約のもとで初めて発揮された

1918

1910

1931

1932

光尊寺

大連別院

函館別院

これを意匠形式の模索とみることもできるが

西本願寺の布教対象が国内外の一般大衆ならば 1908

二楽荘

仙台別院

鎮西別院

伝道院

1 広告塔として衆目を集めること

2 仏教の原点であるインドを彷彿させること

のみを条件に、深奥な学識は意図的に封印したとも 1912

伊東・鵜飼・葛野・岡野・Emory & Webbといった

建築家の独自性は、緩やかな制約のもとで初めて発揮された

1918

1910

1931

1932

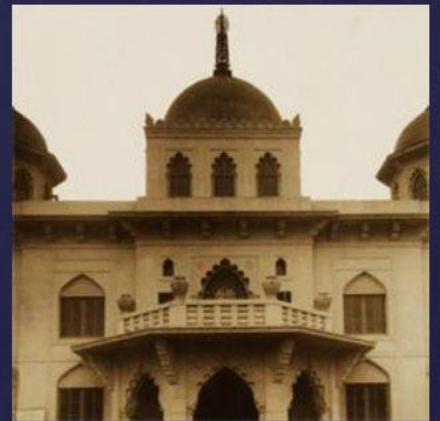
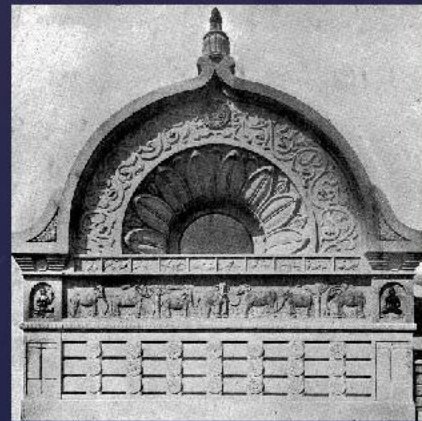
明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厩大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厩大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厩大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厩大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厩大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。



近代西本願寺の別院本堂建築における 「印度佛教式」意匠について

九州大学大学院 建築史学研究室 長谷川尚人

